

新課程に向けて描く

「学校教育デザイン」

単元配列表と単元デザインシートを通じて、 資質・能力の視点での授業を実践

大分県立大分雄城台高校

アウトライン

単元ごとに育成を目指す資質・能力を明確化



教科学習と社会とのつながりを
生徒に実感させたい

2020年度、大分県立大分雄城台高校は、国立教育政策研究所から教育課程研究指定(*1)を受け、持続可能な社会の実現を目指して行うESD(*2)を軸とした、教科横断による資質・能力の育成に取り組み始めた。かつて同校に12年間勤務し、19年度に再赴任した堤荘司教頭は、その背景を次のように語る。

「本校の校訓は『誠実・自主・創造』です。部活動による文武両道の精神が根つき、真面目で素直な生徒が多く、『誠実』は達成しています。一方で、自ら考え、問題に

向き合う力が弱く、『自主・創造』

に課題がありました。例えば、大分県『学習習慣等実態調査』では、学習の意義や疑問点の解決などの項目(*3)の肯定率が他の普通科高校に比べて低い状況でした」

そこで、ESDで求められる資質・能力の育成を教科指導の軸とし、生徒に教科学習で培ったことが社会でどう役立つのかを実感させることで、主体的に学習に取り組む態度を強化しようと考えた。

3年間にわたる資質・能力の育成計画を単元配列表で示す

まず、学校教育目標である『誠実・自主・創造』の校訓の下、社

会において遅く生き抜き、社会

貢献できる生徒の育成」の具体化・共有化を図るために、育成を目指す資質・能力を明確にした。「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)」を基に、自校で育成を目指す資質・能力を「情報整理力・課題解決力・発信力・協働・自他の尊重・チャレンジ精神」の6つに整理し、それぞれの到達度を5段階で設定したルーブリックを作成した。

6つの資質・能力と、各教科・科目、及び「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)の学習とのつながりを示したのが、20年度に作成に着手した単元配列表と単元デザインシートだ。

*1 「ESDを学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究」。 *2 Education for Sustainable Developmentの略。「持続可能な開発のための教育」と訳される。環境、貧困、人権、平和、開発などの地球規模の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことや、それによって持続可能な社会を創造していく姿勢の育成を目指す学習や活動のこと。

SCHOOL PROFILE

設立 1973 (昭和 48) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約 240 人



2021年度入試合格実績 (現浪計)

国立大は、広島大、山口大、九州大、佐賀大、熊本大、大分大、宮崎大、鹿児島大、大阪市立大、北九州市立大、大分県立看護科学大などに 96 人が合格。私立大は、立命館大、近畿大、関西学院大、西南学院大、福岡大、立命館アジア太平洋大などに延べ 230 人が合格。

図1 単元配列表 (抜粋)

教科	単元	資質・能力			
		情報整理力	協働	自己の尊重	課題解決力
国語	現代文編	小説「旅する力」 随想を読んで 他者の物の見方や感じ方を理解し、自分の考えを広げる。	小説「羅生門」 登場人物の心理や行動の意図を、表現に即して的確に読み取り、自己の生き方を考える。	評論「サイボーグとヒューマン人間」 対比に着目し、筆者の主張を読み取り、物事を多角的に考えを身につける。	
	古典編	古文「学治拾遺物語」 古文を読む基礎を学び、古典への興味を広げる。	古文「十訓抄」 登場人物の心情を表現に即して読み味わう。	漢文「故事成語」 漢文を読む基礎を学び、示唆に富む内容を読み味わい、故事成語への理解を深める。	古文「徒然草」 随筆の内容を理解して、人間・社会などに対する作者の思想や感情を読み取り、自分に引きつけて考える。
	現代文編	現代文「学治拾遺物語」	現代文「十訓抄」	現代文「故事成語」	現代文「徒然草」
	現代文編	現代文「学治拾遺物語」	現代文「十訓抄」	現代文「故事成語」	現代文「徒然草」
公民	現代社会	現代社会の諸課題 社会的な見方・考え方を働かせ、社会の課題を適切に捉え、効果的な取り組みや対策を分析・表現で考える。	現代国家と民主政治 民主政治のあり方を理解する。 各国の政治体制の違いをまとめる。	平和主義をめぐる問題を、法や規範に基づいて各人を通して、権利や自由が保障されることを考える。	
	現代社会	現代社会の諸課題	現代国家と民主政治	平和主義をめぐる問題を、法や規範に基づいて各人を通して、権利や自由が保障されることを考える。	
数学	数と式	第1章 数と式 実数や整式のしくみを理解し、複数の文字を含んだ式を整理し、変形できるようにする。	第2章 関数 関数の値の変化やグラフの特徴を理解し、日常の現象と関数の関係を見いだす。	第3章 2次関数 2次関数の性質やグラフの特徴を理解し、日常の現象と関数の関係を見いだす。	
	数と式	第1章 数と式	第2章 関数	第3章 2次関数	

6つの資質・能力について、「情報整理力」は紫、「協働」は赤などと色分けし、単元ごとに6つのうちのどの資質・能力の育成を目指すのか、ひと目で分かるようにした。
 ※学校資料を抜粋して掲載。単元配列表は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp/>) からダウンロードできます。「HOME」→教育情報→高校向けをご覧ください。

図2 単元デザインシート (国語科 現代文B)

関連するSDGs

国語科 (現代文B) 単元デザインシート

単元名 評論『『である』ことと『する』こと』を読んで論理性を評価することを通して自分の考えを深める。

単元目標 文章を読んで批評することを通して社会について自分の考えを深めようとする。【関心・意欲・態度】
 単元の内容を現代の自分に関連づけて自らの社会観を深めたい見聞させたりする。【読む能力】

学習課題 (主たる問い)

情報整理力	課題解決力	協働	自己の尊重	キャリア意識	課題解決力
◎	○	○	○	○	○

身につけたい資質・能力

1次 (4時間)

- 文章の構成や展開を読み取る。
- 接続詞や指示語、具体例などに注意し、キーワードやキーセンテンスを抜き出す。
- 本文構図図を書く。

身についた力を見取るための課題

2次 (3時間)

- ペアやグループで文章の構成や展開について話し合い、問いに対する考えをまとめる。
- ペアワークやバスセッションを行い、相手を示しながら考察する。
- 考えた内容を短い文章にまとめる。

3次 (3時間)

- 知識構成型ジグソー法を用いて、他の文章を読んで複合的に考察点について考察する。
- グループごとの意見交換をし、個人の考えをまとめる。
- 話し合った内容を基に、課題に対する意見を800字で論述する。
 「『価値の再転倒』のためには、どのように思考し、行動すべきか?」

課題の評価基準

【評価基準 (ルーブリック)】
 A: 筆者の主張を正確に捉え、現代日本の問題を本文の内容に即して具体的に述べている。
 B: 筆者の主張を捉え、現代日本の問題を本文の内容に即して述べている。
 C: 本文の内容を踏まえ、現代日本の問題を述べている。

※学校資料をそのまま掲載。

* 3 「授業に積極的に取り組むことができているか?」「目的や自分の課題を明確にして授業に参加しているか?」「授業などの学習を通じて生じた疑問点を自分で調べたり、教員や友人に聞いて解決しようとしていたりしているか?」の3項目。

単元配列表は、総合探究も含む全教科・科目について、3年間の単元の配置を一覧表にしたものだ。単元ごとに、学習材と、育成を目指す資質・能力を示すとともに、6つの資質・能力を色分けし、その単元で特に重視する資質・能力を明記した(図1枠A)。いつ、何の単元で、どの資質・能力を育成するのか、全教科を通して6つ

の資質・能力をバランスよく育むカリキュラムになっているかをひと目で把握できるようにした。単元配列表の作成は、20年4月、各教科担当に依頼。8月には、各教科の試案に対して気づいたことを出し合う全体研修を実施した。そこでの意見を踏まえて、12月までに練り直し、21年1月の全体研修で現在の形になった。

単元デザインシートで
目標、指導、評価を一体化

単元デザインシートは、単元目標と学習課題、評価基準などを示したものだ(図2)。20年4月から、単元配列表の作成と同時に、宇佐美悦子先生(現・大分県立大分西高校)と小野裕史先生(現・同鶴崎工業高校)が主導し、各教科・科目

で1学期の授業分から作成した。

資質・能力の育成を意識した授業づくりができるよう、その単元で育成を目指す資質・能力に○をつけ、単元名は、コンテンツ名だけでなく、育成を目指す資質・能力で記すように工夫した。例えば、「現代文B」の評論では、単元名を「評論『である』ことと「すること」を読んで論理性を評価すること」を通して自分の考えを深める」とし、「身についた力を見取るための課題」と「課題の評価基準」も明記した。

単元デザインシートは、教科内の教師だけでなく、生徒とも共有し、生徒が見通しを持って授業に臨めるようにした。主幹教諭の岩田友佳子先生は、次のように説明する。

「以前から、授業では単元目標を示し、授業後の振り返りを行っていました。今回、育成を目指す資質・能力と、その到達度を測る課題を明示したことで、何を学習目標とし、どのように振り返って、次の単元につなげるのかがより明確になり、目標、指導、評価の一体化を図ることができました」

自分の希望進路と結びつけた探究テーマを設定

総合探究では、20年度から「OGI学プロジェクト」(*4)を開始した。1年次は、「探究ナビ」(*5)を用いて身近な問題解決から探究の基礎を学んだ上で、「住みたくなるまちづくり」をテーマに探究学習を実施。2年次は、キャリア形成を見据えて、興味・関心とSDGs(*6)、希望進路を重ね合わせて生徒自身がテーマを設定して探究する。21年3月には1・2年生の成果発表会を実施した。

「今まで生徒大会などの場面で積極的な発言に乏しかった生徒たちが、成果発表会では活発に発言していました。中には、2年生に『こうした方がもっとよくなるのではないか』といった建設的な提案をする1年生もいました。さらに、生徒からは、『発表を聞いて、授業での学びが探究学習に役立つことを実感できた』という声が聞かれました。私たちの期待をはるかに上回る生徒の成長に、驚きと感動がありました」(岩田先生)

ブレイクスルー

生徒の変化で改革の成功を確信

資質・能力で授業を捉える視点を教科・科目を超えて指摘し合う

堤教頭が最初にESDを提案した際、教師からは戸惑いの声が上がった。現在はSTEAM(*7)教育主任として改革を牽引する大塚孝一郎先生もその1人だった。

「資質・能力ベースの取り組みがESDの推進に重要であることは理解できましたが、全体像をうまくイメージできず、漠然とした負担感を覚えました」

そうした中、8月の全体研修で、単元配列表の試案を教科・科目を超えて議論したことが転換点になったと、大塚先生は振り返る。

「担当する地理歴史・公民科では、知識の習得が大事だと考え、当初、コンテンツベースで単元名を示していました。しかし、研修

で他教科の教師から指摘を受けて、知識を使って何ができるのかというところまで考えなければ資質・能力ベースの授業にならないことが分かりました」

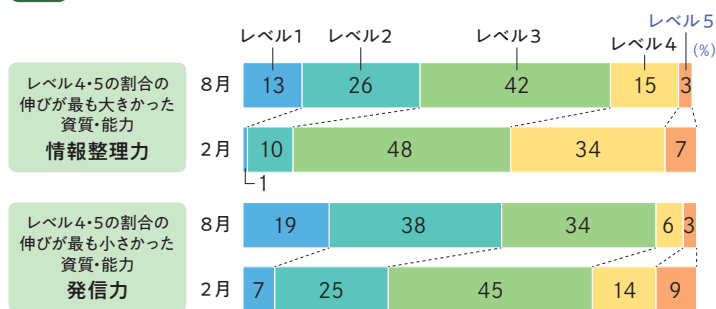
そうして浮き彫りになった課題を踏まえ、単元名は、何ができるようになるかを生徒が理解できる文言にする点を共有し、資質・能力ベースの授業への共通理解を深めたことが、取り組みを大きく前進させた。成果発表会で生徒から、教科学習と総合探究とのつながりを実感したという声が上がったのは、そうした教師の意識の変化が授業に反映されていたからだろう。

また、生徒は、SDGsを意識した発言を日常的にするようになった。例えば、美化・図書などの委員会ごとに活動内容とSDGs

*4 「大分から世界への創造的なひらめきを学ぶプロジェクト」という意味を込め、「Oita Global Inspiration」の頭文字を取って、「OGI学プロジェクト」と名づけた。
*5 ベネッセの教材の1つで、実社会で必要な力を身につけるための探究実践のワザとコツが分かる教材。 *6 Sustainable Development Goalsの略。
2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。 *7 Science、Technology、Engineering、Arts、Mathematicsの頭文字で、科学・技術・工学・芸術を始めとする文化的教養・数学に重点を置いた教育や、人材育成のこと。



図3 6つの資質・能力の2020年度2年生の自己評価(抜粋)



レベルは、ルーブリックで示した5段階の到達度のこと。※学校資料を基に編集部で作成。

とのかかわりを示した一覧表を作り、SDGsの啓発に努めている。「3年生になり、大学の志望理由や入試に向けた小論文で書く内容などにESDの影響が表れてくれば、さらに多くの先生方が取り組みの成功を確信するでしょう。新学習指導要領が実施される際、好スタートが切れる自信を持ってました」(大塚先生)

アップデート

単元配列表と観点別学習状況の評価の連動を図る

生徒の自己評価を年2回実施し、指導改善に生かす

同校では、育成を目指す6つの資質・能力を生徒が自己評価する機会を年2回設け、その結果を基に指導改善を進めている。20年度の2年生では、6つの資質・能力のいずれも、2回目の方が自己評価は高かった。ただし、課題解決力と発信力は、他の4つよりも評価が低く、生徒が課題として認識していることが分かった(図3)。

「取り組みの改善を図るためにはエビデンスが必要です。結果が数値で示されることは、プレッシャーにもモチベーションにもなりません。期待した結果が出なくても、次のアクションにつながるのには確かなので、データから目を

背けず、改善に生かしていきたいと思えます」(大塚先生)

今後の課題は、22年1月までに、すべての単元デザインシートを完成させることだ。普段から資質・能力の育成を意識した授業を行うためにも、一通り作成し、教科内はもちろん、生徒と共有することが重要だと捉えている。

育成を目指す資質・能力に偏りがなにか見直し、単元ごとに行う観点別学習状況の評価の結果がひと目で分かる書式に整える予定だ。

「新学習指導要領で実施が求められる観点別学習状況の評価を単元ごとに行うことができるようにすることが次の目標です。研究指定が終わる21年度末までに、しっかりと取り組んでいきます」(堤教頭)



教頭
堤 荘司
つつみ・しょうじ

教職歴33年。同校に赴任して3年目。



主幹教諭
岩田友佳子
いわた・ゆかこ

教職歴31年。同校に赴任して6年目。国語科。



STEAM 教育主任
大塚孝一郎
おおつか・こういちろう

教職歴27年。同校に赴任して3年目。地理歴史・公民科(世界史)。

